



日本遺産のまち
和歌山県 広川町へ



「百世の安堵」

津波と復興の記憶が生きる

広川の防災遺産



広川町の日本遺産ストーリー

どこまでも広がる青い海、美しい稜線が連なる緑の山々。自然の懷に深く抱かれる
ひろがわちよう
広川町は、かつて、大きな津波に何度も見舞われ、そのたびに力強く復興を遂げてきた。
幼い頃から“防災の心”を大切に育むこの町の伝統は、一人の勇氣ある人物の物語から
生まれた。親から子へ、子から孫へと守り伝える「百世の安堵」^{ひやくせい あんど}。忘れがたい感動を
与えてくれる素晴らしい物語の世界を訪ねてみたい。



JAPAN HERITAGE

日本遺産

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより地域の活性化を図ることを目的としています。



濱口梧陵
(1820~1885)

広川町は、目の前に青い海と美しい海岸線が広がる海辺の町だ。海、山、川など、豊かな自然に恵まれたこの町には、歴史散策、温泉、農家体験、山海のグルメなど、さまざまな楽しみがある。

風光明媚なこの地は、古くから江戸と大坂を結ぶ交通の要所として栄えてきた。しかし、同時に幾度も津波に襲われ、力強く復興してきた歴史を持つ。町の繁栄と人々の暮らしは、つねに津波の危機と背中合わせだったのだ。

今も人々の防災意識は高く、大切に守り継がれている。災害の記憶が風化しないこの町は、平成30年5月、日本遺産に認定された。そこには多くの人の胸を打つ感動の物語があった。まずは、その物語を紹介しよう。

「稲むらの火」の物語

「これはただ事でない。」とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りは、老いた五兵衛に今まで経験したことのない不気味なものであった。—（「稲むらの火」より）

まさに、ただ事ではない描写で始まるこの物語は江戸時代末期、安政元年（1854）11月5日に突如発生した地震によって、この町が大きな津波に襲われた時の出来事を描いている。

五兵衛のモデルとなっているのが、この町で生まれ育ち、ヤマサ醤油の七代当主として、千葉の醤油蔵と紀州を歩き来していた濱口梧陵だ。梧陵はたまたま地元滞りしており、津波に遭遇したのだ。海の様子から、津波が襲ってくることを察知した梧陵は、稲を刈り取ったばかりの田んぼの稲むらに火を放ち、高台の寺社に逃げるように人々に向かって叫び、多くの命を救った。

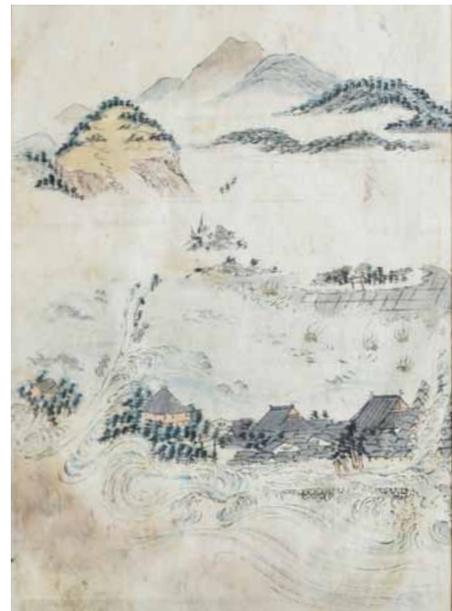
その生々しい光景は、古刹・養源寺が所蔵する「安政聞録」^{あんせいもんろく}に描かれており、また木造三階建ての「御風楼」^{ぎよふうろう}が印象的な濱口家住宅の蔵には津波がここまで押し寄せたと墨書きされた柱が残っている。

この出来事は、明治の文豪・小泉八雲によって「生ける神（A Living God）」として世界中に発表され、感動を呼び、その後「稲むらの火」というタイトルで小学校の教科書にも掲載された。

梧陵の決死の行動と、「A Living God」の物語によって、津波=Tsunami、の言葉は、全世界に知られるようになったのだ。



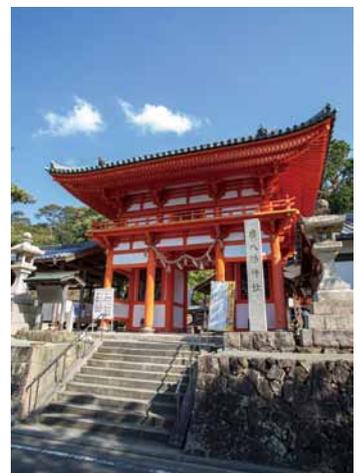
濱口家住宅



安政聞録



稲むら



広八幡神社



小學國語讀本



稲むらの火祭り

毎年、広川町では安政の津波が起きた11月5日の少し前に、防災の記憶を辿る「稲むらの火祭り」という行事が行われる。夕刻になると、町の人々が松明を持って町役場に集まってくる。一本一本の松明に火が灯されると、行列が高台の広八幡神社を目指して歩き始める。

「^{おおみち}大道」と呼ばれるこの道は、普段は高台の広八幡神社と町を結ぶ生活道路だが、江戸の頃から今もなお、津波など災害時には大切な避難経路となっている。その真っ暗な大道に、輝くような光の列が続く。途中で用意された稲むら(稲を刈った後の稲わらを積み上げたもの)に松明から点火されると、大きな炎が空へ向かって燃え上がり、忘れがたい勇壮な光景が広がる。

津波の恐ろしさと共に、「梧陵さんがこうして人々を救ったのだ」という記憶を、年に一度のこの火祭りを通じて、親から子へ、子から孫へ、町の人々は大切にしっかりと伝えているのだ。



稲むらの火祭り

物語に触れる 多彩な歴史スポット

大道の先にある広八幡神社は、津波から多くの人々が避難した場所であり、「稲むらの火祭り」の行列の最終地点ともなっている。木々に囲まれた広々とした境内には古式ゆかしい社が並び、清々しい空気が満ちていて、とても気持ちがいい。この神社には、古くから「津波には、ただ足早に宮参り」と言い伝えが残って



大道



津浪祭

いるが、こんな言い伝えもまた、防災の心につながっていくのだろう。

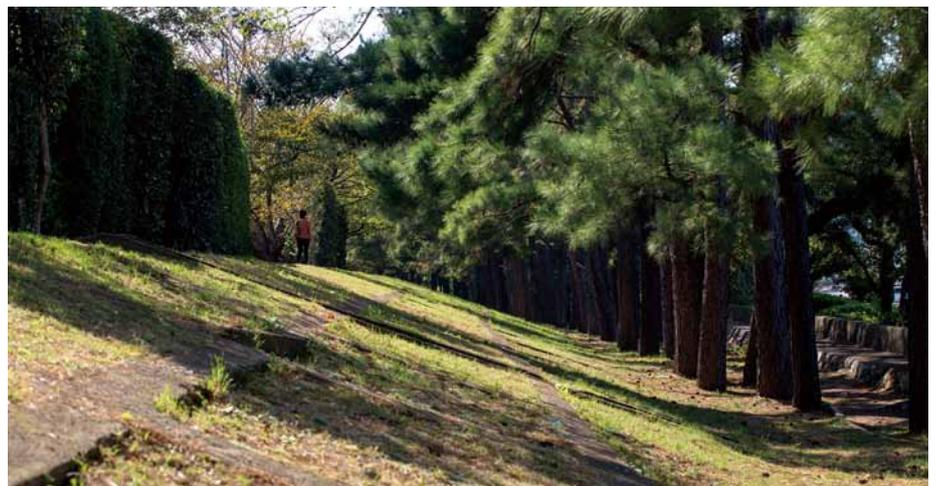
境内から町を見下ろすと、はるか向こうに静かな青い海が広がっている。その昔、恐ろしい大津波がやってきたとは思えないほど、静かで美しい景色だ。しかし、高台と海岸線の間に、ひととき冴える緑の松林が、長い一直線となって続いているのが見える。梧陵が人々とともに造った広村の堤防だ。

一築堤の工を起こして住民百世の安堵を図る一。

私財を投げ打って、村の復興に賭ける梧陵の強い思いが人々の心を動かし、この堤防の築造がスタートした。工事は、小さな子供達まで参加し、それぞれができる仕事を分担して、着々と進んでいった。次第に人々の表情に、笑顔が見られるようになった。堤防工事は人々の生きる希望になったのだろう。4年の歳月をかけて、ようやく完成の日を迎え、高さ5m、長さ600mもの立派な堤防が完成した。

毎年、津波のあった11月5日の早朝、町の人々が総出で堤防に登って土を盛り、安全を祈願する「津浪祭」を行う。祭りの後の堤には、子どもたちの愛らしい手形が堤のあちこちに残っていて、微笑ましい。皆で行うこの祭りの思い出が、そのまま防災意識となって、小さな心に育まれていくにちがいない。

人々に希望をもたらした堤防は、津波の記憶を伝えるとともに、美しいこの町を、そして人々を、今も守ってくれている。



広村堤防

日本遺産の物語を巡るおすすめコース 濱口梧陵ゆかりの地を歩く



4 広村堤防

安政元年の津波の後、「百世の安堵」を掲げた濱口梧陵が濱口吉右衛門らと協力して、村人たち総出で造り上げた堤防。高さ5m、根幅20m、延長600mのこの大防波堤は、下に立つと見上げるような高さがある。重機などない江戸時代によくぞこれだけのものを造ったのだと感動する。美しい松並木の堤防は、普段は町の人々の散歩道になっているが、梧陵の偉大さを改めて感じる場所でもある。国の史跡指定。

6 濱口梧陵像

耐久中学校の校庭に立つ梧陵の大きな銅像。前身となる濱口梧陵像が大正9年(1920)に、旧和歌山県議事堂前に建てられたが、戦時中に供出されてしまった。しかし、それを惜しむ人々の梧陵を慕う気持ちが実を結んで再興に繋がった。何も語らぬ像を見ていると、心に温かいものが満ちてくる。



9 名南風鼻及び鷹島の景観



7 濱口梧陵墓

安政の津波の折、村民を救うことに奔走し、大防波堤を完成させた濱口梧陵は、明治18年(1885)、長年、憧れていたアメリカの視察旅行中に客死した。その墓は、淡濃山の麓にひっそりと建つ。控えめな佇まいで、梧陵の人柄を感じさせる。



5 耐久社

嘉永5年(1852)、濱口梧陵や濱口東江、岩崎明岳によって、故郷の子弟たちが剣術・漢学を学ぶ稽古場(私塾)として創設。安政津波の時に損壊したが、のちに、梧陵らが復興し、学びの場が末長く続くことを願って「耐久社」と命名した。現在、耐久中学校の隣に佇み、梧陵の思いがこもる建物は、生徒たちの成長を日々、見守ってくれている。㊤ 広川町広1123



湯浅広港

広川町役場
(稲むらの火広場)

天皇の波止

津浪祭
稲むら

広村堤防の松

泉家住宅

たちばな
支援学校
B&G
海洋センター

耐久
中学校

溺死者供養碑



0 500m

JR広川ビーチ駅 至御坊

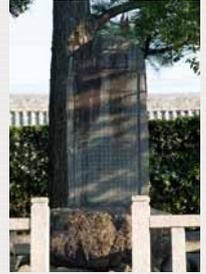
郷土・広川町を守った濱口梧陵。その偉大な足跡が、今も町のあちこちに残る。

安政津波の折、梧陵の稲むらの火によって人々が導かれ避難した「広八幡神社」、山から土を運び、町中の老若男女それぞれが自分のできるかたちで参加して築き上げた「広村堤防」、梧陵の功績を讃える記念館や未来への防災意識を学び、体験する津波防災教育センターを併設した「稲むらの火の館」など、濱口梧陵が成し遂げ、現代まで受け継がれてきた防災の町の今をさまざまに訪ねてみよう。



③ 感恩碑

広村堤防のすぐ近く、海を望むように建つ大きな石碑。広村を守り、復興させた濱口梧陵の偉業を称える文言が彫られている。津波と闘ってきた広村の長い歴史を思うと同時に、これからの防災についても考えさせられる。



② 濱口家住宅

濱口梧陵の「西濱口家」と並んで、広川町の有力な豪商だった「東濱口家」。歴代の濱口吉右衛門が継承し、改修や増築を重ねた住宅が堤防の近くに残る。約1,000坪の広大な土地には、情趣ある三つの建物が、見事な融合を見せる。凝った造りや繊細な建具などに、当時の豪商の美意識が息づく。また奥座敷には勝海舟自ら創作した言葉「超然無俗韻」の書が掛けられ、濱口家と歴史上の英雄との交流を窺い知ることができる。国の重文指定。㊤広川町広1302-1 ※通常は非公開。見学などの問い合わせは、東濱植林(株) ☎0737-63-2211まで。



① 稲むらの火の館(濱口梧陵記念館)

梧陵の「西濱口家」をそのまま見学できる「濱口梧陵記念館」と「津波防災教育センター」を擁する広川町の観光・教育の拠点。展示された貴重な資料から梧陵の生い立ちや晩年までの足跡、そして真面目で暖かな人柄を偲ぶことができる。また「津波防災教育センター」では、広川町の人々が出演する「稲むらの火」のショートムービーが放映されている。また、津波の迫力を体験できる3Dシアターはなかなか見ごたえがあり、必見だ。㊤広川町広671 ☎0737-64-1760 ㊦10:00～17:00(入館は16:00まで) ㊧月曜(祝日の場合はその翌日)、年末年始



⑧ 広八幡神社(濱口梧陵碑)

欽明天皇の頃、河内国、菅田八幡宮(羽曳野市)から勧請されたといわれる由緒ある神社。三間社流造、檜皮葺の本殿は、清々しく壮麗で、美しい。安政津波の折、稲むらの火に導かれて、多くの村人がここに避難した。境内には梧陵と生前、親交のあった勝海舟の撰文と題額を彫った大きな石碑が建つ。その前に立つと、町と海が一望に見渡せる。ここから、声を限りに村民たちに呼びかけた梧陵の姿に思いを馳せてみたい。㊤広川町上中野206 ☎0737-62-2371





1



2



3



4



6



5



7

今も暮らしの中に息づく防災遺産 (日本遺産構成文化財)

安政の津波の記憶とともに、濱口梧陵の偉業とその足跡は、広川町のあちらこちらに残る。

しかし、この町の魅力はそれだけではない。風光明媚なこの土地にふさわしい美しい景観や優れた伝統工芸、歴史的な文化財なども数多く点在する。梧陵の足跡を追うとともに、広川町をもっと広く、深く、じっくりと探訪してみよう。

1. 名南風鼻及び鷹島の景観 [MAP-9]

複雑な海岸線を持つ名南風鼻は広川町の代表的な風光明媚な景観。沖にぽっかり浮かぶ鷹島は、中世の高僧明恵上人が修行した場所で、独特の美しい形をしている。どこまでも青い海と島々の景色は、変化に富んで見飽きることがない。

2. 法蔵寺 [MAP-10]

明秀上人を開祖とする浄土宗の寺。安政の津波の時、村人に危急を知らせた室町時代の建築といわれる鐘楼堂が今も残る。その堂々と風格ある姿は一見の価値がある。国の重要文化財に指定。

3. 南紀男山焼(男山焼会館) [MAP-11]

文政10年(1827)、崎山利兵衛が紀州藩の支援のもとに開いた窯。名工・光川亭仙馬らによって、紀州を代表する窯業として美しく花開いた。会館では作品見学や陶芸体験ができる。㊤広川町上中野88-2 ㊦0737-64-0881 ㊧9:00～17:00 ㊨月曜・火曜(祝日は開館)、年末年始

4. 養源寺 [MAP-12]

法華経6万部の読経祈願を立てた僧侶善上人を開祖とする寺。寺の境内は八代将軍、徳川吉宗より寄進されたと伝わる。津波の実況を生々しく書き残した安政聞録が所蔵されている。穏やかな風情の寺院にも、津波の記憶が色濃く残っている。

5. 安楽寺 [MAP-13]

寺の開基、正了法師の俗名は、濱口佐衛門太郎 安忠といい、広川町の濱口家の始祖といわれる。濱口家とゆかりが深く、代々の濱口家の菩提寺になっている。津波のあと、耐久社が一時、寺の東隣に移転し、その石碑が残っている。

6. 旧戸田家住宅 [MAP-14]

広の町並みの代表的な建造物で近世から製網業を営んだ豪商の邸宅。建物の西側が通りに面し、南側に土間、北に四部屋、土間の後ろに台所を突出すように配置している。二階の出格子の窓の下を漆喰にするなど意匠を凝らしている。

7. 大道 [MAP-15]

安政の津波の被災後、川沿いの道は危険なため、人々は麓から高台へと町の中央を貫く「大道」を第一の避難経路とした。大道の起点となる広村堤防の切通しにある陸間門「赤門」の存在は、ここが防災の町であることを実感させる。



天巢屋 **A**

創業30年、喫茶店として、また食事処として地元の人々に愛される一軒。お昼のおすすめは、地元産の米を使った長芋梅干口付きのしらす丼(800円)。

㊤広川町広308-7 ㊦火曜

☎0737-63-1095



湯浅キッチン **B**

海岸沿いの海カフェで、海を見ながら地元の食材を楽しめる。人気のしらす丼(1200円)は広川町特産の稲むらの塩や湯浅醤油や梅卵とともに。

㊤広川町西広1317-2 ㊦月～金曜 その他の休業日はHP等でお知らせします。

☎080-4486-6789



うちごはん 仁 **C**

質、ボリュームともに満点のおふくろの味を気軽に味わえる。手作りタルタルソースが優しい味わいのチキン南蛮定食(600円)は人気No.1。㊤広川町西広1168-4 ㊦水曜 ☎090-9881-0244

広川町を 楽しむ

もっと

海山の幸に恵まれた広川町には、しらす丼をはじめ、美味しいものが満載!ほかに温泉や農家民泊、お土産どころまで、広川町の多彩な魅力に触れよう!

※価格はすべて税込み(R2.1月現在)



kitchen さんぼみち **F**

稲むらの塩を練りこんだ天然酵母、国産小麦使用の生地を高温の石窯でふくら、パリッと焼き上げたピッツァマルゲリータ(740円)と焙煎にこだわりのコーヒー(340円)は逸品。㊤広川町広1282 ㊦火・水・木曜 ☎0737-23-8100



お食事処 つかさ **D**

手打ちのうどんや二八そばなど、地元で人気の麺どころ。地元の野菜を中心に揚げたての季節の野菜天うどん・そば定食(1070円)はボリュームもたっぷり。

㊤広川町広420-3 ㊦水曜 ☎0737-63-5624



やまめ茶屋 藤滝 **E**

お土産用にもできる焼そば寿司と焼穴子寿司(ともに1500円)がおすすめ(要予約)。自然あふれる環境の下、お食事も楽しめます。㊤広川町上津木875

㊦火曜 ☎0737-67-9515



滝原温泉 ほたるの湯 **H**

露天風呂を満喫できる温泉宿。6月上旬には近隣の河川で蛍が飛び交い、幻想的な雰囲気。お食事処では「おすすめ御膳」などが楽しめる。㊤広川町下津木1539 ㊦第2木曜・12/31・1/1 ☎0737-67-2641 日帰り入浴600円もあり。



ふれあい館 **G**

地元の農産物などを販売。食堂では、食物繊維たっぷりの「しあわせの玄うどん」を使った「稲むらの火カレーうどん」(630円)など、食事メニューも多彩。㊤広川町山本971-1 ㊦毎月第3月曜日(7・8月を除く) ☎0737-22-3211

農家民泊(広川町津木農家民泊組合) **I**

民家に泊まって“暮らすように”広川町を丸ごと体験できる。畑仕事やカヌー、収穫した野菜を使ったピザ焼き体験などの楽しみが満載。1泊2食付き1名6500円～。㊤広川町上津木249 ☎080-3132-8785





広川町の 季節の風物詩

4月



広川ダム周辺の桜

6月



ホタル観賞

10月



広八幡神社秋祭り



稲むらの火祭り

1月



新春熊野古道ウォーク



[車で]

松原JCTから広川ICまで約90分

[電車で]

JR新大阪駅より特急で湯浅駅まで約1時間30分。
湯浅駅より広川ビーチ駅まで約3分。

[空路で]

関西国際空港からJRで約1時間30分。
車で約1時間。
南紀白浜空港から車で約1時間15分。



「広川町ナビ」～稲むらの火のまちなめぐり～

ダウンロードすると観光施設の紹介だけでなく、
公共施設や観光地等までルート情報も提供して
くれる。広川町を楽しむのに必携のアプリ。



iPhone用



Android用

<https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/hirogawatown-navi.html>



発行 広川町日本遺産推進協議会

問い合わせ連絡先 広川町役場産業建設課 ☎0737-23-7764

本パンフレットは平成30年度文化芸術振興費補助金(日本遺産魅力発信推進事業)により作成したものです。
制作/株式会社ステッチ 取材・文/郡麻江 撮影/木下清隆 デザイン/アチワデザイン室 編集/清水賢二 (Stitch Co Ltd)



文化庁

想いを受け継ぎ、文化が彩るまち
「百世の安堵」～津波と復興の記憶が生きたる広川の防災遺産～